

『イエスの母マリヤの信仰』

'20/12/06

聖書箇所: ルカの福音書 1 章 38 節 (新約 p.107)

早いもので、今年も、もう 12 月…。イエス様の御降誕を祝う時期となりました…。そこで、今日の礼拝では、そのイエス様の母親となるべく、神に選ばれたマリヤの信仰というものに焦点を当てていきたいと思ひます。確かに、私たちが 1 番に重きを置くべき存在はイエス・キリストであり…。マリヤではありません。私たちが救われるために与えられた方法も、それはただ、イエス・キリストを信じる信仰だけであり…。マリヤに対する信仰では、勿論ありません。

しかし、天の神様は、イエス・キリストというお方を、この地上へ送るにあたって、マリヤという女性に目を留められたわけですね。そうでしょう？…では、果たして、天の神様が救い主を、この世へ送るにあたって…。その神様が、いい加減な女性を、その救い主の母親として選ばれるのでしょうか？⇒いいえ、決して、そんなことはありません。

命題: イエスの母、マリヤはどのような信仰を持っていたのでしょうか？

そこで今日、私たちが一緒に学んでいきたいのは、今から約 2000 年前…。まだ正式な結婚をする前であった、独身のマリヤが、どのような人物であったのか？一体、どのような信仰を持っていたのか？ということになります。そのために、私が選んだみことばは、ルカ 1:38 であります。たった 1 節ではありますが…。そのみことばには、当時のマリヤの信仰が確かに表われています。そのことで、私が願ひますのは、今日このメッセージを聴いてくださった皆さんが、このマリヤの信仰から学んでくださって、ますます神様に喜ばれ…。その神様に用いられるような信仰者になっていくことであります。

今日のみことばは、1 節だけなので、週報にも印刷してありますが、どうぞ、もし聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるルカ 1:38 を開けていただけますでしょうか？ 今日、私たちが学んでいきたいみことばは、ルカ 1:38 だけなのですが…。このみことばが記されるに至った、その文脈というものにも注目をしていきたいと思ひますので、少し前の、ルカ 1:26-38 を読ませていただきます。

26 ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。

27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。

28 御使いは、入って来ると、マリヤに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」

29 しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考へ込んだ。

30 すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。」

31 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。

32 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」

34 そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知らぬのに。」

35 御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。」

36 ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。

37 神にとって不可能なことは一つもありません。」

38 マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。

I・神の前に、へりくだって いた！

マリヤの信仰…。その 1 番の特徴を挙げるなら、それは「謙遜」だと私は思ひます。このマリヤは、神様の前に、とても「へりくだった」人物でありました。…実に、そういったことが、今読んだ 38 節の、マリヤの言葉に表われています。まずは、そのことを確認していきましょう。

今先程、お読みしましたみことばは、非常に有名な、「受胎告知」と言われる部分で…。『御使いガブリエル』が、マリヤに対して、「もうすぐ、あなたは救い主となるイエス様の母親となるのだ…」ということをお伝えした時の出来事です。どうぞ、その最後の部分である、38 節をご覧ください。ここ 38 節で、マリヤは、『ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』ということをおっしゃっています。これこそ、救い主の母親となったマリヤの信仰の表われであり…。彼女の信仰が実生活に適用された結果ではないでしょうか？

どういふことかと言いますと…。ここでマリヤは、自分で自分のことを、『はしため』と呼んでいます。実は、この言葉(δούλη)は、新約聖書ではたった 3 回しか出てこない、「女奴隷」という意味の言葉なのです。では実際に、マリヤが奴隷の身分であったのかと言うと、もちろん、そうではありません。これは、明らかに、「謙遜」の表現なのです。例えば、今日のみことばのすぐ後の、ルカ 1:48 をご覧いただきますと、『主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。…』とあって、ここでも、マリヤが自分のことを謙遜して、『はしため』という言葉を使っていることが分かります。

また、旧約聖書でも、例えば、モアブ人のルツがボアズに対して言った、『私はあなたのはしためルツです。…』(ルツ記 3:9)という表現や、預言者サムエルの母ハンナが、祈りの中で、『万軍の主よ。もし、あなたが、はしため(=ハンナ)の悩みを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子(=サムエル)を授けてくださいますなら…』(1サムエル記 1:11)と言った時と同じような…。特に、相手を立てたり…。相手に尊敬を持っていたりする場合に使われる表現なのですが…。実際に、聖書の中で使われている例を見てみますと、特に、その(自分が話している)相手との差が大きい場合に使われています。…と言うことは、マリヤはよく分かっていたのです…。自分が、神様の前にどのような存在であるかということをおぼやかしませんでした。

だから、御使いに対しても、マリヤは自分のことを、『ほんとうに、私は主のはしためです。…』と言ったのです。単なる奴隷ではありません！主の奴隷です！「自分は、真唯一の神様にだけ仕える奴隷です！その神様に対して、私は何ら、逆らうべきではない！そんな資格もない！そのような存在なのです…」と、マリヤはここで告白しているわけです。皆さん…。これこそが、真の神様を信じる者が持つべき思い…。本当に救われた信仰者が、その神様に対して持つべき思い…。持つべき態度ではないでしょうか！

でも、残念なこと…。時々、私たちが見たり聞いたりするのは、一部のクリスチャンたちは、その神様に対して、「あなたは私の神様なのだから、早く私の願いを叶えてください！どうして、私の願いを叶えてくださらないのですか！」と言わんばかりです。まるで、自分のために、神様が存在しておられるような…。そんな印象さえ受けてしまいます。皆さんも、そういったような経験はないでしょうか？でも、もちろん、そういった態度が間違っているということは、誰が見ても明らかです。そうですね？それに対して、この時のマリヤは、自分が主のはしためであることを認め…。その神様のおっしゃることならば、どんなことでも従います！というような態度でいたのです。そういったことが、今日のみことばの 38 節から分かるわけです。

II・神と、そのみことばとを愛していた！

マリヤの信仰…、その2番目の特徴を挙げるなら…、それは、「真の神様と、その神様が語られたみことばとを、“愛して”いた！ということであると思います。それもまた、このマリヤが持っていた信仰の素晴らしかった点であると思われる。

一体、どうして、そんなことが言えるのでしょうか？どうぞ、もう1度、今日のみことばである、38 節に記されてある、マリヤの言葉に注目してみてください。ここで、マリヤは、『ほんとうに、私は主のはしめです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』ということを行っています。この時、マリヤは、御使いが語った、神様の御計画に対して、様々な疑問や言い訳…、あるいは、反論をはさむのではなく…、ただ、神様のおことばが成就することを望んでいます。実は、これがなかなか難しいことなのではないでしょうか？

だってね、皆さん…。例えば、このマリヤと同じように、御使いから、「もうすぐ子どもができる…」と預言された祭司ザカリヤの場合は、どうでした？彼は、自分が、「もう歳を取ってしまっている…」ということから、神様のみことばを信じることができずに…、子どもが生まれるまで口がきけなくなってしまいましたでしょ？今日のみことばの少し前の、ルカ 1:6 で教えられてありますように、祭司ザカリヤは、「神の御前に正しい人物…」でありました。…にも関わらず、彼は、神様のみことばを受け入れることが出来なかったのです。

でも、それに対して、マリヤは、御使いの言う、『神にとって不可能なことは一つもありません。』（ルカ 1:37）という言葉を受けて…、38 節 b、『どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』と言って、神様のみことばを素直に受け入れるのです。明らかに、ここルカ 1 章では、祭司ザカリヤの信仰とマリヤの信仰とが対比されているのではないのでしょうか？神の前に敬虔であった、祭司ザカリヤにも勝るような…、そのような、神様のみことばに対する信頼と愛が、マリヤには有ったのです！

今日のみことばの少し後、ルカ 1:45 をご覧くださいますと…、祭司ザカリヤの妻であったエリサベツが、このように告白しています、『主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。』って…。この言葉は、恐らく、神様のみことばを完全に信じきることができなくて…、この当時、まだ口がきけなかった、自分の主人である祭司ザカリヤと、このマリヤとを意識しての言葉である、私は思います…。

また、それだけではありません。今日のみことばのすぐ後に出てくる、「マリヤの賛歌」です。実は、多くの神学者は、この「マリヤの賛歌」と、旧約聖書にある「ハンナ（＝サムエルの母）の歌」（I サムエル 2:1-10）との類似点を指摘します。恐らく、マリヤは、「ハンナの祈り」を暗唱していたと考えられています。現代と違って、聖書のみことばを簡単に手にして…、読んだりすることのできなかった時代…、マリヤは、神のみことばを愛し…、それに対して、全き信頼を抱いていたとも考えられます。

でも、果たして、私たちはいかがでしょう？現代に生きる私たちは、簡単に、聖書を手に入れることができます。簡単に、聖書そのものを持ち歩いて…、いつだって、聖書のみことばをいつでも読めるような…、そんな環境の中に居ます。電車の中で、聖書を読むことだってできるし…、車の中で、メッセージの CD を聴くことだってできます。でも、果たして、私たちは神様が与えてくださった、聖書のみことばを愛している！と言えるでしょうか？神様のお約束のすべてが、間違いなく真実で、神様の教えの、そのすべてが素晴らしいものであると、私たちは言葉だけでなく…、私たちの行ないでもって証ししていると言えるでしょうか？マリヤは、真の神様とみことばを愛する…、そんな女性でありました。それは何より、神様こそが真実なる御方で…、愛と憐れみに満ちたお方であると、マリヤが信じていたからに他なりません…。

III・神に対して、従順であった！

マリヤの信仰…、その3つ目の特徴は、神様に対する“従順”であります。マリヤは、他の誰よりも、神様に対して従順な人物であったのです。

どうぞ、もう1度、ルカ 1:38 をご覧ください。そこには、『ほんとうに、私は主のはしめです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』とあって…、神様の御計画に、自分自身が用いられることを、「よし」としていることに注目してください。果たして、私たちは、この時にマリヤが発した、この言葉の重さを十分理解できているのでしょうか？…と言うのは、この時代、結婚前の女性が妊娠するという事は、とんでもなく、大変なことであったからです。今の時代、結婚前の女性が妊娠をして…、出産をするという事は、そう珍しいことではなくなりました。でも、今から2000年も前の、この時代、もしも、姦淫の罪を犯してしまった者たちには、厳しい罰が用意されていました。例えば、レビ記 18 章や申命記 22 章などを見てみますと、「こういう者は、石打ちの刑で殺されなければならない！」ということが教えられてあります。

実際、この時のマリヤは婚約中の身で、確かに、正式な結婚には至っていませんでした。しかし、この当時は、婚約期間が普通1年ほどあるのが普通で、その婚約期間中も、結婚とほぼ同等の権利と義務がありました。確かに、マリヤ自身には何も身に覚えが無いことであって…、自分の妊娠は聖霊（＝神様）によるものであるということをよく分かっていました…。しかし、そのことを夫になるはずであったヨセフは、当初、知りませんでしたでしょ？

もしも万が一、ヨセフがマリヤを訴えたら…、そこにあったのは2つの可能性です。①裁判で有罪になるか、あるいは、②大勢の者たちから見せしめにされるか？のどちらかでありました。現に、マタイ 1:18-19 には、『18 イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって（＝恐らく、この部分は読者のための文句である。）身重になったことがわかった。19 夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。』とあるように、少なくとも、この時点で、ヨセフは、マリヤが聖霊によって、みごもったことを知りませんでした。だから、ヨセフは、マリヤのことを、内密に去らせようとした…。言い換えれば、婚約を解消して、どこかに逃がしてあげようとしたわけです。

そういったようなことを、すべて予想した上で、マリヤは、『どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』と言ったのです。「ひょっとしたら、自分の妊娠をヨセフが知ったら、自分から離れていくかも知れない…。自分が、さらしものにされるかも知れない…。」そんな不安が、マリヤにあったはず。いや、そう考える方が、よほど自然であります。でも、マリヤは、神様のみこころが、「自分の身を通して」なされることを望んだのです！なかなか…、私たちも、頭の中では、「神様の栄光が現わされ…、神様のみこころがなされるなら、それは素晴らしいことだ！」とは分かっている、いざ、それが、自分を通して…、自分が経験しないといけな！となると、果たして、素直に同意できるでしょうか？

例えば、皆さん、覚えてくださっていますか？…あの偉大なモーセだって、最初、神様に選ばれた時、モーセは、何と言いました？⇒出エジプト記 4 章で、モーセは、「ああ主よ！どうか、他の人を遣わしてください！」ということをお願いしたでしょ？…すると、そのようなモーセに対して、神様の怒りが燃え上がって、それで、ようやく、モーセは、神様の召しを受けて、自分が出ていくことを承知するのです。(^^)

そのように…、私たちの多くは、神様から選ばれて…、自分が救われることには大賛成です。そこには、何の躊躇も、問題も感じません。しかし、例えば、今紹介したモーセやエリヤ…、あるいは、パプテスマのヨハネなどのように、他の誰しもが経験しないような…、大変な働きに召されたとしたら、いかがでしょうか？果たして、私たちは、そういったことを…、素直に受け入れることができるのでしょうか？ひょっとしたら、

実際のところは、多くの方が、その困難さの故に…、あまりの大きさゆえに、逃げ出してしまわないでしょうか？しかし、マリヤは、はっきりと神様に従順を誓えるような者でありました…。そんな信仰者だったからこそ、神様は、マリヤのこを選ばれたのかも知れません…。

ところで、皆さんは、この当時、マリヤが幾つくらいだったか、ご存じですね？…この当時、イスラエル人は、皆、早婚でした。…と言うのも、この当時は、男子は 13 歳で成人、女子は 12 歳で成人とされていたからです。確かに、聖書の中には、この時のマリヤが何歳くらいであったのか？というようなことを明確にするような資料は、ほとんどありません。しかし、当時の習慣から考えますと、マリヤの結婚は遅くても 17-18 歳、早ければ 13-14 歳であったと考えられます。現代で言うと、中学生か、高校生ほどの年齢だったのです！そんな少女が、このような信仰を持ち…、尚且つ、それを証した、というのには驚かされませんか？

天の神様は、このマリヤのような信仰を祝福し…、用いてくださいます。このマリヤが、特別素晴らしいものではありません！私たちは、カトリックとは違って、このマリヤを称賛し…、マリヤのことをあがめたりはしません。しかし、このマリヤは神様の偉大さを知っていたからこそ…、①その神様の前にへりくだり…、②その神様と、その神様から出てくる、みことばを愛したのです。③そして、このマリヤは、この神様を心から愛していたからこそ…、この神様に対して、従順であったのです！

でも、皆さん、考えてみてください！現代の私たちは、この時のマリヤ以上に…、素晴らしい神様の御計画や、また、預言の成就について…、そして何より、このイエス様が自ら進んで十字架にかかって、死んでよみがえってくださったことによる、救いの完成について、よく知っています。また、それだけでなく、神様が約束通りに、約束の聖なる神様を、イエス様を信じた 1 人 1 人に与えてくださった！ということなども知っています。だったら、なおのこと…、今、私たちがマリヤのような信仰を持ち…、それを証しできない理由がないですよね？

<励ましの言葉>

しかし、では一体なぜ、神様は、このマリヤのこを選ばれたのでしょうか？…一体、神様の選びの基準とは、どういったところにあるのでしょうか？…今日は、最後に、ほんの少しだけ、神の選びということに関して、考えたいと思います。どうぞ、皆さん、今日のみことばの少し前、26 節に注目してください！そこをご覧くださいと、天の神様は、救い主となるイエス様の母親とその夫ヨセフのことを、『ガリラヤのナザレ』から、お選びになったということが分かります。実は、この『ナザレ』という町は、旧約聖書だけでなく…、その他の古文書（「タルムード」やヨセフオスの「ユダヤ古代誌」など）を見ても、たったの 1 度も出てこないという点から…、恐らくは、新しく小さな町であったらと考えられています。また、新約聖書でも、ヨハネ 1:46 には、『ナザレから何の良いものが出るだろう。…』ということ、この後でイエス様の弟子となる、ナタナエルが言っています。ひょっとしたら、この当時には、ナザレの町をさげすんで…、こういったような、ことわざや言い回しがあったのかも知れません。

それと同時に、まず間違いの無いことは、この時代、ナザレの町だけでなく…、それを含むガリラヤ地方全体が、多くの人たちの関心から外れていた、ということです。現に、イザヤ 9:1-2 には、『異邦人のガリラヤ…』とか、『やみの中を歩んでいた民…』というような表現があります。こういったみことばは、明らかに、その当時のガリラヤが、神様の恵みの中心舞台ではなかったことを教えてくれています。

しかし、天の神様は、約束の救い主の母親となるべき人物を、そのような、神様の恵みから外れたような…、また、小さな町から選んでくださったのです。そのように…、「神様の選び」というものは摩訶不思議です。私たち人間に、神様が選ばれる基準と言うか…、神が救いへと導いてくださるような理由が分

かるか？と問われれば…、それは分かりません。一体なぜ、神様は、救い主イエス様が育たれる場所を、異邦人が多く居た（＝多くはアラブ人であった）ガリラヤから選ばれたのか？そういったことは、神様にしか分かりません。

それと同様に、一体どうして、天の神様は、私や皆さんのような存在を、『選びの器…』（使徒 9:15、本来はパウロを指すが）として、あの永遠の裁きから救い出してくださったのか？その理由もまた、誰にも分かりません。でも、どうぞ、皆さん。もしできましたら、1 コリント 1:26-29 をご覧ください。そこには、『26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。27 しかし神は、知恵ある者をおしめするために、この世の愚かな者を選び、強い者をおしめするために、この世の弱い者を選ばれたのです。28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。』と書かれていますように…、確かに、神様の選びの基準は、私たち人間には分かり得ません。しかし、敢えて言わせていただきますと…、それは、「神様の前で、自分のことを誇るような者は救われ得ない…」と言えるのではないのでしょうか？だって…、間違いなく、神様は、「自分こそは救われて当然だ！」なんて考えるような者を救ってはくだらないからです。そうではないでしょうか？

どうぞ、皆さん。もし、できましたら、ルカ 18:9-14 をお聞きください。ここで、イエス様は、とっても大切な例えを語ってくださいました。それは、こういったようなものでした。『9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとは取税人であった。11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』

⇒ここで、イエス様が例えを用いて、説明してくださったように、神が義と認めてくださるような人物は、パリサイ人たちのような、行ないは多少正しかったとしても、「私こそは救われるべきだ！」なんて、おごり高ぶったような人間ではありません。むしろ、行ないは多少問題があったとしても…、自分の罪深さに気付いて、真の神様に憐れみを求めるような者を…、心から自分の罪を悔いて、救いを求めるような者を、神は救ってくださるのです。そうですよね？

神様は、そんな信仰の持ち主であった、ナザレのマリヤをイエスの母となるべくお選びになられました。当然のことながら…、マリヤが自分自身で、救い主の母親になることを選んだわけではありません。神様の方が、このマリヤを選ばれたのです！それと同様に…、ひょっとしたら、私たちクリスチャンも、自分自身でイエス様を選び取ったかのように感じる場合があります。しかし、聖書のみことばはこう教えます、『あなたがたがわたしを選んだわけではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。』（ヨハネ 15:16）って…。

⇒このみことばは、イエス様があの 12 人の弟子たちに対しておっしゃられた内容ですが、でも、広い意味では、私たちにも適用できます。彼ら 12 人の弟子たちと同様、私や皆さんも…、自分自身の力で、この神様を…、この救いを勝ち取ったわけではありません！天の神様が、私や皆さんのこを選んでくださ

たのです！本来ならば、永遠の滅びに至って当然の私や皆さんを！神様に逆らい、神様の救いを拒み続けていた私や皆さんを！…でも、そのように選ばれた私や皆さんには、神様から託された使命があります。それは、私たちが出て行って福音を語っていくことであり…、キリストの弟子を作っていくことです。また、このイエス様の教えを、私たちの語る言葉だけでなく…、行ないをもって、証ししていくことです！神様はそうやって、御自分の栄光を、皆さんのことを通して現わそうとしておられるのです。

イエス様の母マリヤは、今日のみことばの少し後、ルカ 1:46b-55 の「マリヤの賛歌」(別名:「マグニフィカト」=ラテン語で「あがめる」の意。)の中で、こう賛美しています。ルカ 1:46b-48、『わがたましいは主をあがめ、47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。48 主はこの卑しいはしのために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。』⇒ここでも、マリヤは、自分のことを、『この卑しいはしのため…』と呼び…、神様が、こんな自分のことを目に留めてくださったことを、ただ、ひたすら感謝しています。マリヤは、神様の選びというものが、神様からの一方的な恵みによるものである！ということ、をはっきりと理解していたのです。

さて、私たちはいかがでしょう？果たして、今、私たちは自分が救われたことを、心から、神様に感謝しているでしょうか？自分のような者を救うために、神様が、こんなにも、たくさんの恵みでもって導いてくださって、今からもまた、数多くの祝福を用意してくださっている…。そのことを、心から感謝しておられるでしょうか？もしも、そうなら、今、皆さんは、毎週毎週の礼拝を…、また、聖書のみことばを通して、神様のことを知る機会を…、また、この神様に仕えることができる！ということ、心から喜んでくださっているはずですよ。

どうぞ、この神様が喜んでくださるような証しを…、あるいは、この神様の偉大さが現わされるような生き方を、毎日の歩みの中で実践していただきたいと思います。そして、どうか、まだ、イエス様をお信じになっておられない皆さんは、この神様のことを、1日も早く信じ受け入れていただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。